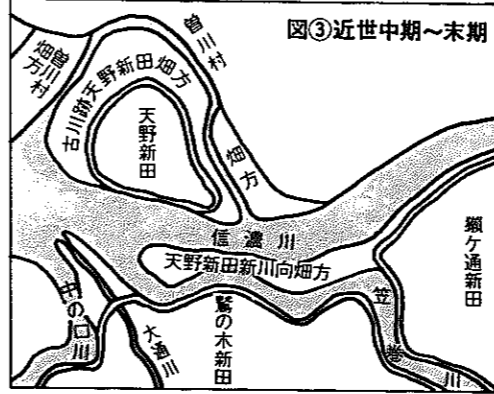
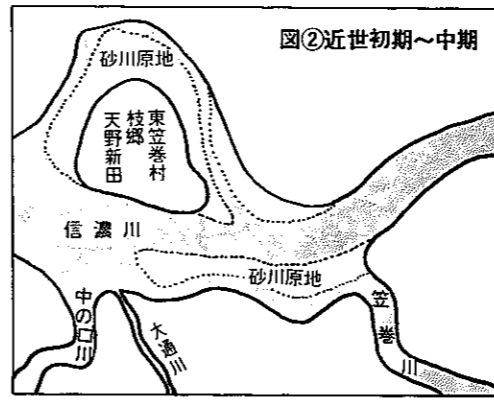
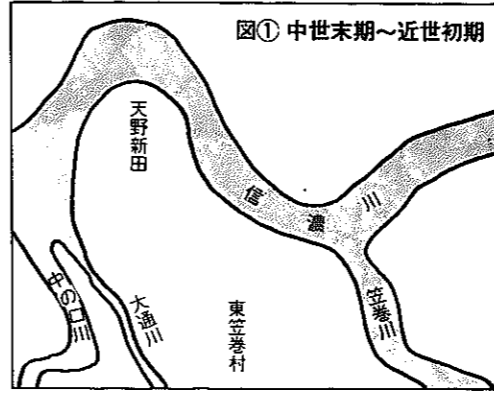


新潟市の飛び地 天野が来年から白根市に編入

◀開発（中世末期）から近世末期までの、天野新田の変遷（図①②③）



境界はこの小川一本。遠い新潟市より身近な白根市へ、と請願を提出した新川向地区



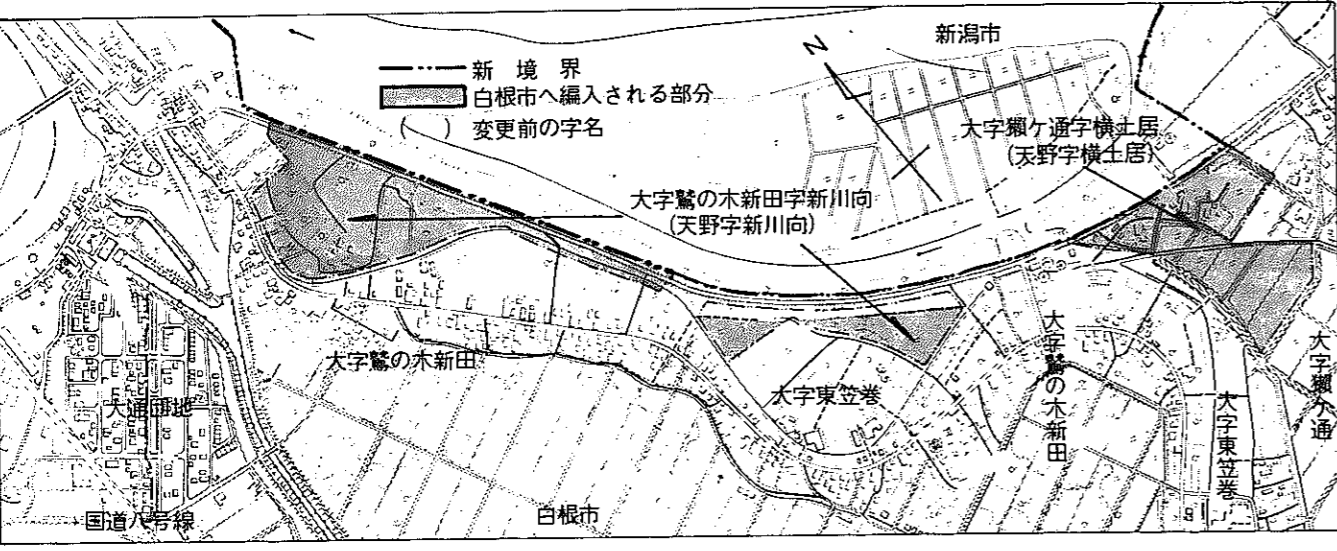
新潟市の飛び地となっている天野新川向及び横土居地区が、来年一月一日から白根市に編入されることになり、二十世帯、九十五人が白根市民として加わります。今月号の「クローズ・アップ」では同地区の現状や発祥を訪ねることにしました。

日常生活面はすでに 当市と深いつながり

同地区は、新潟市とは信濃川を隔てているのに白根市とは小川や道一本で隣接しています。このため、住民と新潟市との結びつきは税金、選挙、ゴミ収集くらいなもの、水道をはじめ農協や土地改良区は白根市と同じくしています。それに隣組、婦人会、老人クラブ、遺族会なども隣接する鷺の木新田や瀬ヶ通に入っています。また、小・中学校は、三十二年の新潟市との合併以来、黒埼町に通っています。

「白根市の仲間に入れてもらっているけど、居候」のようで気がひけています。同地区は、新潟市とは信濃川を隔てているのに白根市とは小川や道一本で隣接しています。このため、住民と新潟市との結びつきは税金、選挙、ゴミ収集くらいなもの、水道をはじめ農協や土地改良区は白根市と同じくしています。それに隣組、婦人会、老人クラブ、遺族会なども隣接する鷺の木新田や瀬ヶ通に入っています。また、小・中学校は、三十二年の新潟市との合併以来、黒埼町に通っています。

新しい境界は、堤防脇道路の信濃川側の法尻で、編入面積は十八万六千平方メートル。編入後の白根市の面積は、七十九・〇六平方キロメートルから七十九・二四平方キロメートルに。白根市と他市町村との分離合併の最近のケースでは、五十五年十二月に、ほ場整備事業で加茂市と土地をやりとりした例があります。住民が白根市に来るといのは、三十一年四月、白根町時代に加茂



新川向地区



横土居地区

天野新田は慶安三年に東笠巻村が開発

ここで、同地区の発祥を訪ねてみましょう。元禄十二年の新発田藩政史料「赤波組新村年代方角付帳」に、「元禄十二年（一六九九年）当天野新田は東笠巻村の管理で、慶安三年（一六五〇年）に同村を開発」と記されています。開発当時の絵図をみると、天野新田が先に、ついで新川向地区が開発されたらしい（図①②③）。

不都合な面が多かったですよ。日ごろの付き合いは、白根市民の方が深かったわけだからね。新沼市民とは名ばかりで、実は白根市民として生活してきたようなものです。



新川向地区自治会長 高橋二作さん（67歳）

名ばかりの新沼市民は不便ばかり

新潟市の住民サービスは、ゴミ収集くらいなもので、冬場の通勤通学路の除雪さえしてもらえないものでした。飛び地ということ、

新潟市と合併した時にも、当時の白根町へ編入してもらいたかったという運動が起きました。でもその時は、税金とかの面で一部に反対があり実現しませんでした。今回は、全員が白根市への編入に同意しました。やはりこういうことは地区民全員の同意がないとうまくないですからね。

信濃川をはさんだ二つの出洲を天野新田と総称し、厳密には新潟市側を天野新田、当市側を天野新田字新川向と呼んだ。元禄以後は天野新田が、弘化以後は新川向がそれぞれ陸続きに。元禄から文政にかけて生産も上がり、赤波組東笠巻村枝郷から同組天野新田に一村独立。こうして開発から名主制が廃止される明治四年までは、一貫して小吉郷赤波組に属していた。明治十七年に、曾川村外八ヶ村戸長役場の管理に。町村制が実施（明治二十二年）されるに際し、明治二十一年七月「飛び地はすべて点在地に編入すべし」という訓令が出されたが、新川向地区は理由不明のまま曾野木村に合併。しかし、開発以来の実質的な統治義務だけが当地に負わされることになった。したがって矛盾、不都合が生じ、明治四十年に大郷村長、鷺巻村長（代理）が、中浦原郡長に「境界変更之儀二付意見上申」を提出し、当地両村に編入方を要望。しかし、この上申は却下されたらしい。昭和三十三年に曾野木村の合併で新潟市に。

こうした変遷をたどった同地区は、ようやく白根市に編入されることになり、住民の期待も大きいものがあるようです。

インタビュー